

残 糸 曲

1976.2.9

李賀の「残糸曲」1002(2064c)は、ふしぎな味わいをもつ美しい詩だ。その味わいを語ろうとする。つかんだはずの美しさがすりぬけてゆく。呉正子という。

この篇は晩春の景をいう。残糸は、あるいは柳とし、あるいは遊糸とす。

晩春の景をうたうというのはいい。題の「残糸」が、柳の枝なのか、遊糸なのか、はじめから解釈がわかれるのではない。そのうえ、柳はともかく「遊糸」についてもは「きりせぬ、手もとの手書ではへかげろふ。いとけふ、野馬Vなどといひ、「かげろふ」には入陽炎・蜉蝣V「いとけふ」にはへかげろふ、野馬V、「野馬」にはへかげろふ、遊糸。陽炎Vなど。鈴木虎雄がへるりの糸游(陽炎)Vというのはそれらをうけるのであろう。荒井健がへちぎれ残ったくもの糸Vというのは、くもの糸のことかとうけたが、もしそうならば柳でも遊糸でもないわけである。わたしがこの詩を訳したとき、柳の方向で解釈していた。いずれも通らぬことはないが、すっきりとは落ちつかぬ。斎藤暁がいう。

・残糸 名りりの遊糸(いとけふ)。遊糸とは、くもや小虫などが始めでかえったときついていた細い糸が無数に空中に飛びただようもので、春の景物になっている。中国では珍しくないが、日本では比較的すくないので、よく陽炎(水蒸気)の作用で生ずる現象、かげろう(

のこととまちがえられている。残糸を柳の枝、すなわち細枝の糸と解する説があるが、どう
ない。

これを読んで目のさめる思いがした。荒井注も、わたしのうけとった集ではなく、斎藤注のい
う細い糸だったかもしれぬ。

ただそのへいとゆうVについてさらにくわしく知りたいと『李華研究』に書いたら、山中智恵
子氏が、川口雄『かげろふ日記』(日本古典文学大系20)、同『西域の虎』にその考証のある
ことを教示された。さっそく求めて読み、長いあいだの渴をうるおした。次章はすべて西書から
の引用である。すこし取寛縮約した。

二

かげろふ日記はわが国において最も早い散文の自叙伝であり、一人杯の日記体小説である。逆
細母は自ら名づけていう「――思ものはかなきをおもへば、あるかなきかの心ちする。かげろふ
のにきといふべし」。……愛を求めて見失い、母らぎを求めて裏切られる悲痛な敗北の記録。――
天にみえがくれてとびさる「かげろふ」なるものはまことに彼女にとって人生の象徴であった。

それはヨーロッパで聖女^{はた}の機^{はた}のおさから落ちた「ノートルタムの糸」(Miss Nothe-Dane)だと信
ぜられたもの、シェークスピアがジュリエット姫のあしどりの軽さ、恋のあだな喜びを形容した
ところ、ゴッサーマ^{Gossamer}とよんだもの、わが常民の間で「雪迎え」とよばれていたもの、晩

秋や早春の空をけうけうと流れるようにとびかう糸遊である。目にみえない蜘蛛の子が、自ら紡ぎ出す糸に乗って、風媒によって散布される姿の、もつれとぶ五彩のてりかげり、私は戦争の終末が近づいた晩秋のある日、人間を絶した立山の雑穀谷の澄んだ空気の中をとぶのを見た、——かけろふのものはかなげにとびちがふを、ありとみて手にはとられず、みれば又けくろむしろすきえしかげろふ、あるかなきかの……源氏物語のかけるふの巻につぶやかれるものは正しく *gossamer* であつた。これに定家あたりが蜻蛉の文字をあてたばかりにそれ以後の人々をことごとく誤らせ、ついにながくその実体を見失っていたのであつた。大系20 八五、八六頁

ふく風につけてもとけむさゝがにのがよひしみちはそらにたけとん 注 「さゝがに」は蜘蛛「とはん」に飛ばんと訪わんとをかける。こころは蜘蛛が糸にのつて空を浮游する、いわゆるかけろふ (*gossamer*) のこと。新古今 恋四に出。↓補注一二 同 一ニニ頁

いろがけるこころとみればつきてとふ風け、しくもおもほるかな 注 「色かける」はあるかなきかの蜘蛛の糸にほのめき色が変り易いこと。↓補注一三 同 同

補注一二 秋の風が吹くにつけて、蜘蛛が糸にのつて空の通り路をとんで行きかうのであるが、そのかけろふの通り路も絶え、兼家の訪れも絶えたあなたをお見舞いするの意。……この歌を旧注すべて衣通姫の「わがせこがくべき宵なりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも」(古今聖武歌) の故事によつて解したのは、かけろふが *gossamer* であることを知らなかつたところから起つた誤解であつた。 同 三三九頁

補注一三 「色かける」は *gossamer* があるかなきかにほのめいて、斜の光線を反射してフリ

スムのようにたえず色がかわって空をとぶところからいう、吹く風につけて訪ろうと仰せられるが、その秋風にかけるふの糸もたえずほのめきつつ色かわるように、人の心のうつろうことに思ひよえられて、まがまがしくさえ思われるの意。 同 同

昭和十四年三月中旬の東京朝日新聞に東北大学教授岡田雲之助理博の「雪迎へ談義」という科學隨筆が出た。私は読みながら筆を打った。要を撮るところである。

結城哀草果氏の「小風土記」の記事に雪迎えのことが見える。晩秋の候、羽前・国の空を、細く白い糸のようなものが飛ぶ。するとその翌日あたりから雪が降り始めるので雪迎えとよぶ。その正体は動物が植物かわからないという。実物が東北大学の佐藤肇夫氏のもとに送られてきて、調べると蜘蛛の吐く糸で最近學界に報告された。この現象はわが国では注意されなかったが、西欧では普通のこととみえ、蜘蛛類の専門書にもちろん、辞典にも出ている。すなわち晩秋の候、時には春にも、快晴の日に蜘蛛の子が糸を吐き、風に乘じて空中に浮かび、遠く運ばれて、着陸したところに新天地を開拓しようという、たんぼほの種子のように種族散布の姿で、英ではゴサマア・独では妖精の紡いだ糸、仏伊では聖母の紡ぐ糸、蘭では秋の糸とよぶ。

この正体が蜘蛛の糸とわか、たのは欧州では一七世紀の末ころ。一方中国の辞書では遊絲を蜘蛛あるいは青虫の吐く糸で、空中に飛揚するものとして、ゴサマアに遊絲の訳語をあてる。しかしわが国では不思議にもゴサマアの訳に必ず陽炎をあけ、逆に和英辞典で陽炎をひくとゴサマアと出てくる。小川環樹教授の示教によれば古来遊絲を詩賦に多く用いるが、陽炎の義に使った例はない。のみかは宋の王洙の杜鵑詩の注（一〇三八）長篇二（ころ）や、羅頤の爾雅翼（一

一七四年）等は明らかに遊絲を蜘蛛の糸としている。例えは後百では、蜘蛛が「春秋二時、得暖風而生。吐遊糸、飛颺其身」とある。 西域の虎、一ニ五、一ニ六頁

昭和十九年十一月一日…… 雜穀谷の沢を歩いていて、午後一時すぎ、立山弥陀ヶ原の熔岩台地が、逆光の中にうすあおいかげりを帯びて、数百メートルの絶壁をなして屹立していた。絶壁のかげがきれて光が仰げる位置になったとき、私はおどろくべきものを見た。そらいっぱい、静かにうかんで移動していく、きらきらと光る細い白銀の糸の群れ。手をのばせばとらえられそう。二メートルほどの高さから上方へ無限の高空に無数にすきまもなくばらまかれている。近いところは長さ一メートルから一・五メートルあまり、上方へ行くにつれて次第に小さく、ついには弥陀ヶ原の上方へ白金粉でもばらまいたように光りかがよいつつ消え去っていく。目の高さのところでは何も発見されない、二メートルほどの高さになり、太陽光線と眼とが一足の角度になると、はじめて忽然と白銀の細くかすかな糸がかがやき出すのである。「ありとみて手にはとられず——」私はこれがゴサマアだと直覺した。なんとかしてその実体をとらえようとして、沢を右に左にかけ歩いた。私はふりがざした木の枝の先にかろうじてひっかかったものによって細い、極めて細い蜘蛛の糸であることを確認したが、その上にのっているはずの蜘蛛の子はどうとう確認することができなかった。（蜘蛛の子はいなかったのではなく、あまりに小さくてみおとしていたのだということがあとでわかった。）

山岸徳平博士が子供のころの秋の午後、越後蒲原郡の野をゴサマアが飛ぶのをみて、「蓮の糸」と呼んでいたといわれ、フランスの学友F氏がパリのBois de Boulogneで六月初にとぶのをみて

「処女の糸」El de la Virgen とよんでいたし、S氏は故郷のイル・ド・フランスのAuxerreで、またその夫人はEtampesで子供のころ、秋または春とぶのをみて、母から「処女の糸」と教えられたという。同 一三三—一三九頁

『紅樓夢』（伊藤漱平氏訳）三十六回、主人公の宝玉が少女役者の藝官がなわているところに近づいて

起きて『ふうわり糸遊』の一節を歌ってくれまいかと頼みました。（中国古典文学大系44）伊藤氏の注によると、これは明の湯顯祖の戯曲『牡丹亭還魂記』第一の餉の句「裏晴絲求閑院」をさすという。

ふうわり糸遊 しずかなる庭に風にのりてくる。／あでやかに紅紫と咲きそろひし花の／かく枯れ井 破れ垣をかざるとは／よろしき辰 めでたき景もこの天になにかせん／うれしき友 たのしき事は誰が家の院にかある／——もはら汝 花にも紛ふ佳人なればこそ／水にも似て歳月は流れゆく

この晴絲は遊糸、飛糸のことである。虫のはく糸すじだと中国でいっているところから、やはりゴケマアであることを認識しているのである。同 一四一頁

「かげろふのあるかなきかにはのめきてあるはあるとも思はばらなむ」（空徳、後蔭）。「世の中と思ひしものをかげろふのあるかなきかの世にこそありけれ」（六帖一、かげろふ）。文選に沈約の三月三日詩「遊糸映空転」。千載佳句、春興に「遊糸縈乱碧羅天、劉禹錫」とある。菅家文草では蜘蛛と題して「隨風転轉輕」「秋腸軟自蜘蛛縷、寸寸分分断尽還」。田氏家集では「碧

天無電遊糸「天外遊糸或有無」といひ、後撰集の「あるかなきにけめる世」などと歌わ
れるのと同軌。西欧では「ノートルタムの糸」はマリアの袂（おし）から落ちた糸くずだといわれて
いたが、小野篁も「当天織錦羅綾」（春生）と吟じて機織の糸屑だと見たてる。土御門院御集
に「大空に誰が織りなせるくれはとりあやに乱るるのべの糸けふ」 大系 一七一頁

三

遊糸についてけりきりした、李賀の残糸もほとんど遊糸にちがいない、ただ手続きとしてけ
賀が後読したと思われる先行文献との対応を検討することゝ欠かせない。「残糸曲」の本文をか
かげ、残糸をいちおう遊糸とみて、その試訳をそゝえ、吟味してゆきたい。

垂楊葉老鶯哺兒

しだいやなぎの葉は老いて 鶯は雛はぐくみ

殘絲欲斷黃蜂歸

残んの糸遊たえだえに 黄蜂かへり来

綠鬢少年金釵客

みどりの鬢の少年と 金の釵のたをやめ

縹粉壺中沉琥珀

はなだの玉の壺のうち 沈む琥珀

花曼欲尋春辭去

花見の台 暮れむとし 春 まかりしに

落花起作迴風舞
榆英相催不知數
沈郎青錢夾城路

落ちし花 起ちあがり 迴風 舞ひ
榆の英 ちりいそぎ 数しれず
沈郎の青銅の銭がや まちの路をせばめて

「残系曲」は李府とみてよいものだが『李府詩集』に見えない。唐・宋人の送唐詩にも見えないようである。第三句の「少年」を明本系諸本が「年少」とする以外には文字の異同もない。

李賀の詩は、拙稿「蘇小小」でもいつ屋のように意味的展開を考へる際にもその押韻を顧慮する必要があるのである。(E. G. Pulleyblank, 'The Rhyming Categories of Li Ho (791-817)', (清華學報・新七卷第一期))は、李賀の通韻は、詩律の進歩変化とは見がたく、語音の転換変化によるものだ、という。語音の変化に無知なわけでは批評する資格はないが、同論文は賀の詩の意味的展開と押韻との対応についてほとんどふれていない。参考までに、沈兼士『広韻声系』によつて「残系曲」を言標化し、その古に現代の北京音による発音を並記する。

zwei jang iap. lau. eng buo' i'zi
dzian. si i'wok. tuan jw'ang. bung. k'wuei

chui yang yè lǎo yīng bù ér
cán sī yù duàn huáng fēng gū

li'wok. pien' s'iau nien. kiam tsai k'ok.
p'iau p'uan. fuo. t'ung. di'iam xuo pak.

lǚ bīn shào nián jīn chāi kè
piǎo fān hú zhōng chén hú pò

·Xwa ·d'ai iwoe. nuo·tsi uen. zi k'iuo°
luwêk. Xwa k'ji tsak. yüi. pung miu
·ju kiep. siang. tsuài. p'uat. tie siu°
·siam. l'ang tsien. dzian kap. ziang luo°

hua tai yü mü chün cí qú
luò huā qǐ zuò huí fēng wú
yú jiā xiàng cūi bù zhī shù
shěn lǎng qīng qiān jiā chéng lù

第一句の「兒」は上平5支。第二句の「歸」は上平8微（独用）で、両句は不完脚韻。
 第三句の「客」と第四句の「珀」はともに入声20陌で、両句は完全脚韻。
 第五句の「去」は去声9御（独用）。第七句の「數」は去声10遇。第八句の「路」は去声11暮
 で遇と同用。この三句は不完脚韻と考えられる。そして第七句は韻をふまめ句と見るが、「舞」
 は上声9蟹だから、第七句の「云」と変則的な通押をしたとあるいは語音の転変の影響とする
 などの見方もあるかもしれぬ。
 なお、「沉」は「沈」の俗字だが、蜀の集の宋本系諸本では、固有名詞には「沈」を、その他
 には「沉」を使用するようである。

四

△扱するに楊と柳とは別。楊は枝勁脆にして短く葉は円闊にして尖る。柳は葉長くして狭く枝軟かにして、韌かなり。Vと『説文通訓定声』のいうように、楊と柳とは区別があるが、それらを通じて楊柳といい、すなわち日本の「やなぎ」で、ことに「垂楊」といえば「枝垂れ柳」である。同じ枝垂れ柳をうたう作に「少年樂」524(2087)がある。

芳草 落花 錦の如き地／二十 長遊す 醉郷の裏／紅纒動かず 白馬驕る／垂柳 金絲

香 水を払う／吳城 未だ笑ひず 花開かず／緑髪 簪墮し 蘭雲 起る／陸郎 醉に倚り

羅袂を牽き／奪ひ得たり 宝釵の金翡翠

『樂府詩集』に李華の作として掲げるものだが、賀の集には見えず、疑わしいものだ。仮に賀の作としてもここでは「垂柳」の文字を用いる。意味内容が同じでありながら異なる文字を使うのは、言調の都合と、その制作に根拠として使用した古典を暗示するなどの理由による。

『詩経』齊風「東方未明」に入柳を折って園に樊すれば、狂夫も瞿瞿たり。Vは枝垂れ柳。陳風「東門之楊」の入東門の楊、其の葉は靡靡。Vは枝の上にあがっているヤナギ。一列をあげるとポプラ。小雅「采芣」に入蒨葍往來しとき、楊柳依依たり。Vというのは枝垂れ柳である。『采芣』の句は出征兵士が、故郷のやなぎを、ひいては妻（あるいは恋人）を思っているがなんでいるのだが、次に引く楚辭「九歌・怨思」の句にはその影がさしているがむしろ、作者は漢の劉向

空宇の孤子を閑れみ枯楊の冤鶴を哀しむ。孤雌は高壙に吟じ鳴鳩は桑榆に棲む。

「枯楊」が「垂楊葉老」を「冤鶴」が「驚啼兒」を思わせないでもない。で掲げたが「怨思」がただちに「殘思曲」とかわれるというのではない。だが次に引く漢の枚乗の「柳風」は關係が

ありやうだ。文字は『西京雜記』（明刊『漢魏叢書』）に拠った。

忘憂の館の垂條の木、枝は逶迤として紫を含み、葉は萋萋として緑を吐く。出入する風雲、去來する羽族、既に上下して好音、亦黃衣にして終足、蜘蛛は響を厲しくし、蜘蛛は絲を吐く。階草漠漠、白日遲遲、ああ細柳、輕絲を流亂す。君王はその度を淵穆にし、豐英を御して之を翫び、小臣は醫職なれども、これがために詞を陳ぶ。ああ楽しいかな。ここにおいて、繡に縹玉の酒を盈て、爵して金漿の醪を獻じ、燕趙千族、六苞に盈滿し、弱絲清管、風霜と共に隨す。鎗鎗啾啾、野條寂寥、鶴×英旄、襟を列ね袍を聯べぬ。小臣は鴻毛を效すなく、空しく鮮を銜みて醪を嗽り、また河清み海竭くと雖も、終に景を邊操に増すことなけん。ここには枝垂れ柳があり、糸遊があり、縹玉の酒があり金漿の醪がある。『西京雜記』はこの文の前に八梁の孝王、忘憂の館に遊び、諸遊士を集め、各おの賦を作らしむと説明する。李賀には「梁臺古愁」4186(20830)があつて孝王の園遊をうたう。枚乗の「柳賦」を知らなかつたはずはない。そうだとすれば「残糸曲」の舞台もまた、憂いを忘れるに足るたのしい館であつたに違いない。とはいへ、でも梁王の臺沼の宏大を諷刺する習の夢想するところである。むしろ北周庾信が一枝の上、巢父は巢を安んずるの所を得、一壺の中、壺公は身を容るるの地あり、

と賦したやうな小園であつたろう。庾信は賀が「還自会稽歌」でうたつた、た夷肩吾の子である、

楊柳門花樹にあらず、樓に依つて自ら春を覺ゆ。枝邊に粉色通じ、葉裏に紅巾映す。日を帯ひて簾影に交わり、吹に因つて帝塵を掃う。簾を拂うはまさに意あるべし、偏之に桃李の人なるべし。

梁元帝 詠楊柳樓管柳

垂楊は桃李の人を得て髪を冠れたであろう。それは『易』の大過に、

枯楊 梯を生ず

というのに似なくてはならない。『易』には続けていう、

老夫その女妻を得たり。利あらざることなし。

女妻とは、清の王夫之によれば、古い処女の再嫁にそうである。

吾は聞け、垂楊の葉は老いる。それでも吾は妻を子を生み、葉はひたひたに餌をふくませる。人なべて世は事もなしと西方の詩人はうたうが、あるいはそれが人知あらざることなしと云ふか。

残糸欲折剪蜂歸

雙信「和吳法師遊昆明二首」その二にいう、

秋光に晩天に霞は紅く、遠處は中川に汎べり。密菱は浴鳥を障ぎ、高荷は釣船を没す。研珠は断菊に繋り、残糸は断剪を待てる。落葉は斗酒を催し、棲鳥は一絃を送る。

「残糸」の語を詩に用はる所としてこれは古いと思う。賀はこの詩から「残糸」の語を学んだこと、ほとんど疑いなく、たゞ信の残糸を譚正璧、紀毅華「雙信詩賦選」では人藕が折れると糸がある、だから糸が折運を結ると云うと注する。もしそうならば、字面は同じでも、單の残糸とはまったく別物ということになる。う、一「残糸曲」に運の糸のいりこむ余地はない。もっとも信の作では「高荷」「折運」の語があるから「残糸」が運の糸となりうるので、それを賀の作に

移せば柳の糸とみるのが後かだろう。ただ、蘆を折れば糸があるのには確かだが、池で折れた状態の蓮にその糸がまつわづいていて、ということとは、事実として疑わしく、信の詩の文脈でも表現価値はマイナスだろう。この「残糸」は遊糸とみるべきだろう。それならば、蘆の残糸も遊糸だとするのがよいのだろうか。

遊糸が詩文にわたれる例でわたしの知る古いものはさきに引いた枚叅の「柳賦」で、見られるように「吐絲」とある。この絲はくもの巣と疑えぬこともない。はっきりに「遊絲」の語を用いる例として、梁の武帝の「天安寺頌園堂」がある。

和に束じて蕩として猶豫す。ここに聊か止息す。連山去つて限りなく、長洲望み極まらず。参差として光彩照り、左右みな春色。曉曉、遊絲を隔ち、出沒、飛翬を看る。その樂しみ信に忘れ難し。儼然、寧ろ飾あらん。(飾、一に極に作る)

簡文帝「三月三日率爾成詩」

芳年、美色多く、異景、復た妍遙。蘭を握りしは是れ旦、艾を採りしも亦、今朝。迴沙、碧水溜れ、曲岫、桃夭を散ず。綺花、一種に非ず。風絲、百條亂る。雲は起る相思觀、日は照す飛虹橋。繁華、妹色炫く。燕趙、妍妖豔たり。金鞍の汗血馬、寶鬘の珊瑚翹。蘭馨、穀袖に起り、蓮錦、瓊腰に束す。相看て綠樹に隠れ、人を見て還ら自ら嬌なり。玉柱、羅襪に鳴り、磔腕、迴潮に泛ぶ。洛濱、羽を拾うにあらずんば、兩握、詎ぞ椒を貽らん。の風絲が遊糸であることは、簡文のこの詩に和したのであるう沈約の「三月三日率爾成章」によって推測しうる。